

認知言語学的観点を取り入れた 陳述副詞「きっと」「必ず」の意味研究 —日本語教育のために—

王 冲

学位取得年月：平成 19 年 3 月

取得学位名：人文科学博士

学位授与機関名：お茶の水女子大学

【キーワード】陳述副詞、 意味構造、 概念変化、 カテゴリー体系再編成

【要旨】

「きっと」「必ず」にはともに推量、意志、依頼、確率の用法がある。本研究では認知言語学のアプローチを取り入れ、まず二語の意味の分析を試みた。その結果、「きっと」「必ず」は抽象的なスキーマが確立しており、呼応関係にある文末表現によって各用法になると考えられるため、漠然性が高いと窺えた。また、通時的に「きっと」「必ず」の意味変化を見ると、明治期では、二語は両方とも推量用法が多く使用されていたことが見受けられた。さらに、具体的な文を用いて分析してみると、二語は両方とも推量用法から他方向的に拡張しているということも明らかになった。この二点から、推量用法は「きっと」と「必ず」の理論的なプロトタイプであると推測できた。しかし、現代の二語の心理的プロトタイプは日本語母語話者の「きっと」と「必ず」についての産出頻度と初出頻度から、それぞれ推量用法と意志的用法であるとわかった。つまり、現代日本語では、「きっと」は推量用法の役割を分担しているのに対し、「必ず」は意志的用法の役割を分担していると考えられる。これに対して中国語の「一定」には推量、意志、依頼用法はあるが、確率用法がない。しかし、「一定」は「きっと」「必ず」より各用法の適応範囲が広く、意志的用法がプロトタイプとして定着している。こうした日中両言語の意味構造の違いによって、中国語を母語とする日本語学習者が持っている「きっと」「必ず」の意味知識は、日本語母語話者が持っている意味知識とは大きな相違があることが明らかになった。実際、学習者は母語である中国語の「一定」の意味構造の転移を受けている可能性があるため、意志的用法がプロトタイプとなっており、日本語の「きっと」「必ず」の意志的用法を多く使用していると窺えた。さらに、学習者は「きっと」と「必ず」の境界線について曖昧であり、これらの語の理解は不安定であることも観察された。

第二言語習得とは言葉のカテゴリーの再編成のプロセスであるということもできる。カテゴリー再編成のためには、カテゴリーの成員、スキーマ、プロトタイプ、意味構造を再編成しなければならない。この再編成は「概念変化」「カテゴリー体系再編成」を経てはじめて実現できるのである。中国語を母語とする日本語学習者が「きっと」「必ず」の意味を正しく理解していないことの原因は、無意識に「きっと」「必ず」と「一定」が類似した意味であるという想定のもとに使用していることによる可能性がある。そうだとすれば、学習者は「一定」から「きっと」へ、あるいは「必ず」への「概念変化」を十分に引き起こすことができなかつたのである。また、「きっと」と「必ず」とが役割分担を起こしている。このような違いに気づき、「概念変化」を起こさないと、また、日本語のこのような特殊性を知らないと、目標言語の新しい認知的体系も習得できない。したがって、目標言語のカテゴリー構造や目標言語と母語のカテゴリー構造との異同を明示的に示すことは効果的であろう。つまり、教材や教室指導では、「きっと」「必ず」および中国語の「一定」の用法を明示的に示し、これらの語のイメージをトップダウン的に示すことだけでなく、学習者にできるだけ幅広い具体的な用例に触れさせた上で、プロトタイプ、各用法の使用範囲、及びその意味構造を明示することで、3つの違いを見出させていくことが非常に有益であると思われる。

(おう ちゅう)